

韓国 通度寺 拝登

駒沢女子大学学長代理・教授 文学博士 東 隆 真

私どもは、一九九四年（平成六年）十月二十四日から二十六日まで大韓民国に滞在し、二十五日、慶尚南道にある仏宝宗刹靈鷲山通度寺（トンドサ）に拜登した。

韓国の仏教は、二十六の宗団と、九千二百三十一の寺院と、二万五千二百五人の僧侶（比丘一万七千六百五十六人、比丘尼七千五百四十九人）を擁している。

このうち、代表的な仏教教団・大韓佛教曹溪宗についていえば、在籍僧侶の人数は、一万十

七人（比丘五千二百三十一人、比丘尼四千七百八十六人）である。

主だった寺院の居住者を例示すると、曹溪寺（チヨゲサ）二千九百七十七人（比丘千二百六十人、比丘尼千七百十六人）がもつとも多く、ついで海印寺（ヘインサ）が九百七十二人、通度寺が六百八十六人、梵魚寺（ボモサ）が五百六十八人、修徳寺が三百四十二人（比丘七十人、比丘尼二百七十二人）の順になっている（曹溪宗総務院の統計公表。『中外日報』平成六年十一

月十五日付け)。

韓国の三大寺刹というと、仏宝、法宝、僧宝をあらわす曹渓宗の大寺院である。

仏舍利、仏袈裟を奉安して仏宝をあらわす通度寺(六四七年、慈蔵法師の開創)、八万大藏經(高麗版大藏經)を収藏して法寶をあらわす伽耶山海印寺(慶尚南道)。八〇二年、順應、利貞の二法師によって開創)修禪社を設けて僧宝をあらわす曹渓山松広寺(ソングアンサ、全羅南道。一一〇〇年、知訥法師の開創)が、それである。

曹渓宗の宗祖は、通度寺、海印寺では太古普愚法師(一三〇一—一三八二)とし、松広寺では知訥法師(一一五八—一二一〇)としているようである。また、曹渓宗から分離した太古宗では、太古普愚法師を宗祖と仰いでいる。

私どもの一行は、横浜善光寺留学僧育英会の黒田武志理事長(善光寺住職)、佐藤俊明常任理

事(千葉県龍光寺住職)と同会理事の私(駒沢女子大学教授)である。

さらに、とくに日本仏教学界の代表として財団法人松ヶ岡文庫長の古田紹欽博士(秘書役・渥美ゴルフ商會社長渥美和也氏)に加わっていただいた。

現地での案内役は、三日間を通じて通度寺の僧で早稲田大学大学院生である李煥秀和尚(もと育英生)と、通度寺聖宝博物館の釈梵河館長が献身的につとめて下さった。はじめに両師に對して、衷心より謝意を申し上げるものである。

今回の訪韓には、二つの目的があつた。

まず、通度寺の老天月下方丈が平成六年三月に来日し、育英会の設立十周年記念式典にご臨席いただいたので、これに対する答礼。次に老天月下方丈が大韓佛教曹渓宗の第九代宗正(管長猊下)にご就任になられたどうかがつたので、慶祝の意をあらわすためである。

老天月下方丈は、一九一五年、かつて百濟の都であつた扶余でお生まれになり、今年八十歳。十八歳のとき出家、得度し、一九五六年、通度寺の住持となり、一九五八年、四十三歳、金剛戒壇伝戒阿闍梨となり、さらに、曹溪宗中央宗會議長、東国大学理事長、総務院代行、宗正代行、曹溪宗元老、社会福祉法人通度寺慈悲院理事長などを歴任されている。韓国でもっとも徳の高い僧として尊崇されているお一人である。

二十四日夜、慶尚北道慶州市のホテル現代に旅装を解いた私どもは、翌二十五日午前十時すぎ、通度寺に拝登した。管長猊下は、一昨日、急遽入院されたとのことで、拝眉することはかなわなかつた。しかし、定岳泰應住持や知庭教務院長ら通度寺一山の破格のご歓待を受けた。

佐藤常任理事、古田博士、私、黒田理事長の順で、老天月下方丈の管長猊下ご就任のお祝い（私の挨拶文は、別記のとおり）を申しあげた。



通度寺応接間にて



通度寺定岳泰應住持(左)と
聖宝博物館長积梵河老師



通度寺開山堂に詣でて 古田紹欽博士と東先生

黒田理事長は、端溪大硯、通信機材などを贈り、通度寺より私どもに対して茶碗、花瓶などが記念品として授与された。古田博士は、通度寺開山慈蔵律师をおまつりする開山堂に参拝したいと、強い要望を述べられた。通度寺開山慈蔵律师といえば、通度寺の靈鷲仏教文化研究院では、一九九四年十月十三日に行われた第五回定例学术会議の記録冊子（B4判五三ページ）『慈蔵思想の文化史的考察』をいただいた。そこには、

東国大学洪光杓教授の「慈蔵の造営觀研究」をはじめ斯界の専門学者によつて、慈蔵法師の華厳思想あるいは四分律や国家意識と政治的役割りなどに関する論文六篇が収められている。

一行は、大雄殿で威儀をただして般若心經を読経し回向して、とくに許されて金剛戒壇に向かつた。定岳泰應住持のご案内で大雄殿のうしろの石造の金剛戒壇（中央に仏舍利塔がおまつりされている）に入り、住持のご先導で、読経

しながら右へ一匝した。神秘的な感動をおぼえた。

このあと、諸堂を拝観し、聖宝博物館で釈迦河館長からくわしいご説明をうけながら諸宝物を拝観した。なかに、鎌倉、円覚寺釈宗演老師（一八五九—一九一九）の大幅が掲げてあつた。それは、芦葉に乗つた達磨大師の画讚で、「茫茫宇宙無知己／万里長江一葉芦／応朝鮮白鶴鳴師需／日本瑞鹿山主演洪嶽并写」とあつた。

三年後には、約八億円の予算で、二千坪の規模をもつ四階建ての鉄筋コンクリートの大博物館を建設するということで、眼下、工事中であつた。完成したら、必ずご案内すると館長は言われた。

前後するが、定岳泰應住持は、来年から開局する予定の仏教テレビ会社（英語名＝ブッディースト・テレビジョン・ネットワーク）の社長に就任されることになつてゐるらしい。そのパン

フレットをいただいた。ひるがえつてみるに、日本には独立した仏教テレビ局はまだない。

一千数百年のむかし、朝鮮半島の仏教は、日本仏教のふるさとであり、ルーツであつた。そしてまた、現代の韓国仏教は、現代の日本佛教を凌駕する点が多くある。

日本の佛教徒の多くは、もつとも近い韓国の佛教事情をほとんど何も知らない（もつとも、私もその一人で、お恥ずかしいことである）。日本の方が先進国であるといつたような誤った先入観や固定観念を抱いているのではなかろうか。もし、そうだとすれば、それは、日本の佛教徒の慢心であり、誤解であり、不幸である。

このような不幸の原因の一つに知識の不足があげられよう。知識をもつには、おたがいの頻繁な交流が必要である。交流は、相互の理解を生む。理解は、友好と親善につながっていく。交流を盛んにするにはどうしたらよいか。日本

の佛教徒は、この点に深い配慮をめぐらさなければならぬであろう。（以上、「中外日報」平成六年十二月三日付け掲載。ただし一部補筆する）前後するが、以下、思い起こすままに記録しておこう。

私どもは、二十四日午後六時すぎ、夕闇せまる釜山空港から金井山梵魚寺に直行した。梵魚寺は釜山の東萊地区、海拔八一〇米の金井山の中腹にある。六七八年、新羅の義湘大師が創建した古寺で、慶尚南道三大寺院の一つ。国宝を数多く収蔵するという。

梵魚寺という寺名はなにか曰くがありそうだ。調べてみると、むかし新羅の南方にある山のなかに岩があり、岩のなかに泉が湧いていた。その泉のなかで梵天の魚がたわむれていた。ここに寺を造り、その美しさにちなんで梵魚寺と名づけたらしいのである。黒田老師も、「實にいいお寺だなあ」と感嘆の声をあげることしきり。

梵魚寺のシンボルといわれる一柱門をくぐり、とくに許されて、大雄殿に入堂し、般若心経を読經し、回向した。折しも晩課がつとめられており、僧たちの讀經の声と鐘の音が全山にこだまして、私どもを幽玄の境に誘つた。

二十五日午前六時すぎ、ホテルを出て吐含山石窟庵（トナムサンソックラム）、吐含山仏国寺（トナムサンブルグクサ）に詣でた。

石窟庵に向う山の中腹で見る日の出のすばらしさは韓国随一の眺めといわれる。その日の出を見せてやろうという釈梵河・李煥秀両師の思いやりは、残念ながら通じなかつた。今朝はあいにく曇天であつた。

さて、石窟庵へ急ぐのは私どもだけではない。朝早くから老若男女の人影はひきもきらない。私は、石窟庵詣では、二度めである。

仏国寺の東北に位置する海拔およそ六〇〇米の吐含山の頂上あたりに石窟庵がある。新羅の



仏国寺の裏山にて

宰相金大城が新羅景德王一〇〇年、七五一年に建てた。石窟庵は海東に面して造られた。つまり、日本の方角を向いている石窟寺院なのである。永いあいだ荒廃して忘れられていたが、一〇〇〇年あまりのちの一九〇七、八年ごろ郵便配達人が偶然に発見したという。

石窟庵のご本尊は、花崗岩の石造の仏像である。釈迦如来坐像とも阿弥陀如来坐像ともいわれているが、結跏趺坐する降魔像としての釈迦如來像とするのが広く行われている説のようである。高さ一、六米の蓮台の上に、二、七二米の仏像が安置されており、周囲には三八体の彫刻像がある。国宝第二四号。東洋の美女といわれる。このような完璧の美しさをそなえた石仏を私はほかに知らない。仰ぎ見て形容のことばを失う。聞くところによると、ある韓國カトリック教の枢機卿は、この仏像を仰いで、長い沈黙のあと、やがて、「私もやはり韓国人なのだなあ」

とつぶやいたという。

釈梵河、李煥秀両師のご高配で、私どもはとくに許されて窟内に入り、般若心経を読誦し、回向した。古田博士は、石像の端に頭を垂れて長い祈念を凝らしておられたのは、実に印象的であった。

仏国寺は、新羅の法興王時代、五三五年創建の古寺である。慶州市から一六糠ばかり離れた吐含山の中腹にある。須弥山と西方淨土をあらわす韓國佛教寺院建築の精髓といわれ、国宝が六点もある。石橋、多宝塔、釈迦塔などたくさんの石塔は有名である。その華麗で端正な伽藍の配置とたたずまいは、日本の奈良の法隆寺や東大寺を思われる。ずいぶん荒廃していたらしいが、先年、悲運の佛教徒朴正熙大統領の尽力によつて復興されたという。大雄殿で読經、回向させていただいた。堂内に、次のような額が掲げられていた。「仏国寺大伽藍丹青大施主記



石南寺で

大施主 大韓國 大統領 朴正熙閣下 施賜
一金二百四十萬整 以比功德 南北統一 聖業
完遂 国泰民安 世界平和 如意円満 成就大
願 仏紀二九九四年 西紀一九六七年 丁未十
一月二十二日】

余談だが、大統領といえば、こんなことも記しておこう。

私どもが訪韓する三日ばかりまえに、韓国ソウル特別市の大河、漢江（ハンガン）の橋梁が崩れ落ちて、数人の死傷者が出て大惨事が報道された。たしか首相は辞任し、市長もその座を降りた。金泳三大統領はクリスチヤンであるが、どうも韓国佛教徒の一部のあいだでは、クリスチヤンが大統領になると不吉なことが起きるというデマがひろがっているらしいのである。それを聞いたとき、私は一笑に付した。

帰国後、一二三日経つて、読売新聞（一九九四年一〇月二九日付け）を見たとき、デマの内





容はともかくとして、そのようなデマがひろがっていたことは本当だつたのだとあらためてその記事に注目したのであつた。

「〔ソウル28日＝河田卓司〕韓国で橋梁（きようりょう）崩落、遊覧船炎上と大型事故が続発

している中、「大型事故の多発は金泳三大統領（きようりょう）が青瓦台（大統領府）の敷地内の石仏を撤去したためだ」とのデマが広がり、青瓦台側がこれを打ち消すため二十七日、その石仏を公開すると

いう珍しい一幕があつた。金大統領は国会では野党から内閣総辞職を求められるなど苦しい立場にあるが、街のデマにまで対応させられ、神経の休まらない日が続いている。

問題の石仏は大統領官邸の裏山にある「如来座像」（高さ約百十セン）。統一新羅時代の八世紀の作で、もともとは新羅の都・慶州にあつたが、日本の植民地時代に寺内正毅（シネジョンイク）総督が移したものだという。

街に広がつたデマは、キリスト教信者の金大統領が昨年一月の就任後に石仏を撤去したため、事故を招いているとの内容。このうわさは前からあつたが、今月二十一日の橋梁崩壊事故を機に広がつていった。

韓国では信仰心の厚い人々が多く、宗教がらみのうわさは意外なほど説得力をもつて広がるうえ、一部外国紙までこのうわさを報じたため、青瓦台も無視できない事態になつた。

石仏公開は韓国紙の青瓦台担当記者を対象に行われ、青瓦台側が「石仏はもともとの場所にそのままある」とデマを否定したが、異例の石仏公開は韓国人の精神世界の一端を垣間見せたともいえそうだ」。

石窟庵、仏国寺に拝登して、一旦、ホテルに引き返して朝食をすませ、そののち通度寺に向つたのであるが、通度寺での様子については先述のとおりである。

通度寺を下山して、通度白蓮舎、国立慶州博物館、興輪寺、芬皇寺に拜登、見学した。なかのハーデスケジュールをこなしたものである。ご老体の吉田博士、佐藤老師がお元気である。

靈鷲叢林念佛院（通度白蓮舎）の住持は通度寺僧伽大学元教授金円山和尚である。和尚の表情は精悍で、打てば響く頭脳の明晰さを感じさせる中年僧。四年ぶりの再会をよろこんだ。こじんまりした僧院の前庭には、強い晚秋の日射しのなかに木の実がむしろの上に干してある。坐禅堂の本尊は阿弥陀如来とか。部外者の入堂は固く禁ずる。日本の曹洞宗の僧堂と同じである。堂に「講禪堂」とあつたが、講義と坐禪をならび行う堂の意味だそうで、禪を講ずる建物の意味ではないという。

国立慶州博物館は、国立中央博物館に次ぐ規模をもつ。池健吉館長を訪問。私などよりお若

い、そしておだやかなお人柄とお見うけした。大急ぎで見学したが、韓国の歴史と文化がいかに仏教の深く長い影響のもとにあるかを知った。また、韓国の古代文化のレベルが予想以上にすこぶる高いものであることを真正面から見せつけられたおもいであつた。

慶州博物館の西側庭園には、聖徳大王（七〇二一七三七）神鐘、一般には、「エミレーの鐘」（エミレーとはお母さんの意）とよばれる大鐘（重さ二五トン、黄銅一二万斤。高さ三三三釐、国宝第二九号）が吊されている。統一新羅、第三五代景德王（七四二一七六五）の代に完成した。幼い女児を人柱として溶鉱炉に投じて完成了。そのため、鐘の音は「エミレー」と聞こえたという。悲しい物語りである。いまも除夜の鐘が、仏教僧侶や信者によつて撞かれている。博物館は鐘の音だけを録音して館内売店で頒布している。録音は、周囲の交通を一時全面的に

ストップし、騒音を避けて行つたという。

博物館の近くに興輪寺址がある。興輪寺は、新羅法興王の時代、五三五年に、その工が始められたと伝えられる古刹である。いま、その寺址は、荒れた農地である。隣接地は、天鏡林興輪寺というお寺である。老若二人の尼僧さんが

漬物をつくつておられる様子であった。柔和で素朴なものごしになんともいえないなつかしさをおぼえて、カメラにおさまっていた。そして、私は、その寺址のあたりから許可をえて古い瓦の破片を一つ記念のつもりでいただいた。



芬皇寺（ブンファサ）は、新羅、善德女王三年、六三四年に建立された古刹である。いま、下部の三層だけを残した博塔と開山堂などが残っている。境内の日本語の案内文によれば、石塔は、石を博のように削つて造つてあるところから、「模博石塔」とよばれる。現在は三層になつてゐるが、元來の規模が何層なのか正確にはわかつていない。一層の塔身には四面に仁王像が彫刻されている。また、境内には「芬皇寺復元鳥瞰図」が掲示してあつたが、これによればかなり大きな寺域と十数個の堂舎をもつ大刹であつたことがわかる。通度寺開山慈藏律師も住職したが、統一新羅時代に登場した元曉大師（六一八—六八六）の寺として名高い。元曉といえど、韓国ではその名を広く知られている国民的高僧である。開山堂のまえには、寺の復興のために瓦の寄附をよびかける趣旨の文章が掲げてあり、なかには日本人も応じていた。

二十六日午前中、慶尚南道彦陽面の迦智山石南寺（ソクナムサ）に案内された。この寺院は渓流を目の前にした山麓にあり、十数棟の堂舎から成る尼僧の修行道場である。

新羅、憲德王（八〇九—八二六）のころ創建された。開山は道義國師という。裏山に高さ三、五三米の石南寺浮屠（浮屠は石塔のこと。宝物第三六九号）があり、私どもは香を手向け、合掌、礼拝し、般若心經を読誦して、回向した。

歴史のうえでは、迦智山宝林寺が知られる。高麗時代の禪宗すなわち九山禪門の一つで、入唐求法僧道義國師の寺である。中国禪宗第六祖慧能、馬祖道一、西堂知藏、道義に至る南宗禪馬祖系の法脈である。

さて、現在の石南寺住持は道門和尚という尼僧さんで、四〇年まえに入寺し、六年まえに住持となつた。師僧で先代の老尼は九六歳の高齢で、ほとんどおもてには顔を出すことはないと

いう。

僧堂は、大雄殿と寺務所の奥にあり、部外者が入ることはもちろん近づくことも許されない。ただいまおよそ三〇人の尼僧たちが三年間の禁足を前提として修行にいそしんでいるとのことであった。

寺務所の一室に招かれて、道門和尚から松茶（ソンチャ）をいただいた。松茶は、松の実に砂糖を加えて水で煮るのだそうで、およそ三か月か四か月かけて出来上がるという。血が清くなり、頭の働きもよくなるとか。ややアルコール化して、甘い舌ざわりであった。古田先生が裏山に竹は生えていませんか、竹筒に入れるとさらにおいしくなりますよと、にこにこしながら伝えると、住持も笑っていた。松茶は、韓国でもいまは珍しく、ほとんどつくることはないらしい。石南寺でも遠来の珍客にもてなすのだという。

石南寺には百人くらいの尼僧さんが修行生活を行っているとのこと。先年、私どもは、ソウル特別市の北方、北漢山国立公園の僧伽寺に詣でた。奇岩怪石の山中に、堂々たる伽藍と巨大な磨崖仏を擁する尼僧の大修行道場のありさまに圧倒されたものだった。韓国の尼僧界は健在である。そして、その将来はきわめて明るい。

はじめにも書いたとおり、日韓仏教、韓日仏教は、おたがいにいよいよ交流をさかんにすべきである。そして、おたがいを知り、おたがいに力を合わせて、仏教の興隆と両国の親善、世界平和の実現へとつとめたいものである。

（横浜善光寺留学僧育英会理事）